KEN 03

FREE

Copyright © 2013 RYUKOKU UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL OF SHIN BUDDHIST STUDIES All Rights Reserved.

ハワイ研修紀行

10泊11日ハワイ島～オアフ島の旅

この夏、実践真宗学研究科・文学研究科合同によるハワイ研修が行われた。研修の目的は〝ハワイにおける真宗伝道を学ぶこと〟であるが、現地に足を運び実際に体感することで、日本とハワイにおける伝道スタイルの違いに驚かされ、また現地での伝道方法がとても身近な問題のように感じられた。

今回現地では、海外の人々に真宗の伝道を行っている開教使の方や、現地で様々な真宗関係の活動をされている方等の特別講義を受け、現地で活躍されている人々の自らの経験を通して感じたこと等を聞かせて頂き、これからの日本における伝道を再考する機会を与えられたような気がした。それは、日本もハワイと似た状況に近づいてきていると私自身が感じ取ったからである。

たとえば、日本の法話の形式はアメリカのスピーチの形式に似てきている。今の日本でもハワイでも長いスピーチは好まれず聞き入れてもらえない。主題をはっきりさせ、出来るだけ短く話さなければ、聞き手には伝わらないのである。

次に、ハワイでは宗教を知識として学ぼうとしている方が多いという部分である。「○○を学ぶことのメリット、○○を学ぶことの意味や意義」ということを聞いてくる方が多いらしく、中には「感謝するメリットとは」という質問も投げかけられるそうだ。このように、今回のハワイ研修を通して、自らの寺院活動に対する姿勢が大きく変化した気がした。

さらにプロジェクトダーナからは、多くのことを学ばせて頂いた。プロジェクトダーナとは、簡単に言ってしまえば、傾聴や介護ボランティアのようなものである。真宗の中から始まった活動であるが、現在活動されている方の中にはキリスト教徒の方々も多くいらっしゃるそうだ。一般の方の生活の中に宗教活動が溶け込んでいるハワイの現状から、多くのことを学ぶことができ、日本においてもこのような形式が理想的であるように感じられた。

11日間という短い間ではあったが、ハワイでの伝道を学ぶ上で、参考になる活動や考え方が数多く得られた有意義な研修旅行になった気がする。日本の真宗教団における従来の形式・伝統を守ることも当然大切なことではあるが、海外での多くの事例を参考に日本における伝道方法を再考することが、これからの浄土真宗に求められているのではないだろうか。

Text : Keiju Sato

1. ハワイ別院正面。　2. ヒロ別院にて。曽我輪番と一緒にぱちり。　3. ハワイのお墓。なんだか雰囲気が少し違ったり。
4.BSC での夕事勤行。調声は池内君。　5. ダイヤモンドヘッド山頂にてぱちり。

六宗派間対談

Exceed a Denomination

Text : Ryoe Negoro　Photo : Toshitaka Naka　Design : Kenji Ito

この度、大正大学大学院生・立正大学大学院生協力のもと、日本仏教六宗派間による宗派間対談が実現した。参加頂いた宗派は大正大学より天台宗・真言宗（豊山・智山）・浄土宗、立正大学より日蓮宗、そして龍谷大学浄土真宗である。

今回の対談テーマは「これからの寺院のあり方」について。目的としては、これまで閉塞的であった宗派間の壁をとっぱらい、現代において仏教が抱える様々な問題に各宗派はどう取り組んでいるのか、またどう考えどう対応していこうとしているのか、この点について論じようとするものである。

当日は多くの聴講者にもお越し頂き、大変緊迫した中での対談スタートとなった。一体どのような対談となったのか。是非一読して頂きたい。

天台宗×真言宗（豊山・智山）×浄土宗×日蓮×浄土真宗

司会―伊藤 顕慈（龍谷大学／浄土真宗）
対談―根来 亮慧（龍谷大学／浄土真宗）
秋田 晃瑞（大正大学／天台宗）
安孫子稔章（大正大学／浄土宗）
鈴木 雄太（大正大学／真言宗智山派）
野乃部利生（大正大学／真言宗豊山派）
徳永 前啓（立正大学／日蓮宗）
書記―石川 大夏（龍谷大学／浄土真宗）
柱本 惇（龍谷大学／浄土真宗）

―まず簡単に自己紹介からお願いします。

根来 京都龍谷大学からやって参りました、根来亮慧です。自坊は大阪岸和田にございます。

秋田 私は茨城から今日は来ました。大正大学の天台学、秋田晃瑞です。

安孫子 私は、東京の江東区にある「正覚院」という浄土宗のお寺の者で、こちら大正大学に通っています安孫子稔章です。

鈴木 東京にある江東区の「寶蓮寺」というお寺から来ました、真言宗智山派の鈴木雄太と申します。

野乃部 私も東京出身、豊島区にお寺があるのですが、大正大学の真言宗豊山派、野乃部利生と申します。

徳永 私は立正大学から参りました、日蓮宗の徳永前啓と申します。本日袈裟を持ってきておりませんが、日蓮宗の僧侶でございます。

―ありがとうございます。ではまず各宗派、どんな寺院活動をしているかについて、順番にお聞かせ下さい。

根来 知り合いのお寺の方なんですけども、ヨガの教室をやってはる方がいてはって、そのヨガはお堂の中でやられてるんですけど、その時にお勤めをしたり、また婦人会の方がお集まりになってそういった活動をされているというお寺が大阪にございます。そして、僕自身のお寺の話なんですが、浄土真宗は元々、行を重んじるわけではないんですが、うちのお寺では一度だけ写経をしたことがあります。中々お寺に足を運んで頂けない現状にございますので、写経をしてですね、日常からお勤めできる聖典を、自らの手で作ってい頂くという目的で、写経という活動をさせて頂きました。

秋田 最近のことだと、自坊がHPを開設しましてこういうご時世ですのでそういったネット環境での情報というのが一番知りやすいのかなと思います。今は本であってもネットで買う時代であって、その本がどういう内容で書かれているのかというレビューもネットで見れます。そういう時代ですので、たとえば人がお寺に行きたいなーと思った時、まずはHPがあるかどうかを見ると思うんですね。だからHPを開設しました。あとは昔からやっていることなんですけども、講がありまして、いわゆる集まりですよね、地域の人たちの集まりとして講がありますので、毎月一回縁日の時に講の方に集まって頂いて、一緒にお経を読む。と、そういう活動もしております。まぁ写経もしておりますけども。…そんな感じですかね。

安孫子 私の自坊の活動についてですが、浄土宗はお念仏の教えですので、お念仏をお称えすることが行の中心でして、うちは「別時会」と言いまして、お檀家さんを集めて、一緒にお念仏をひたすらお称えするという会を月に一回やっております。お写経もですね、月に一回、お写経やるかお勤めするか月によって替わるんですけども、同じようにお檀家さんを集めてやっております。他に僕なんかは浄土宗の青年会の活動も取り組んでいるんですけども、青年会主催で御別時を月に一回やっておりまして、別時念仏会ってのが活動の中心なのかな。あとは写経・写仏等は青年会が中心になってやってますね。また地域にも超宗派による会なんですが「深川仏教会」というものがありまして、そちらの会で花祭りのパレードでしたり、灯籠流し等しています。一つの寺院でやっている活動は少ないですね。

鈴木 うちのお寺は住職と話し合いまして、何か一つ、テーマを決めたほうがいいんじゃないかという話になりまして、『人々の心の拠り所となる、非日常空間』というテーマを決めたんですね。そこから活動をいろいろ増やしていこうということになって、大きく3つのカテゴリーにわけて活動しているんですけども、まず1つ目が毎週、あるいは隔週の「おけいこの会」というのをやっておりまして、仏教関係でいうと御詠歌の会と写仏の会をひらいておりまして、仏教に関係ないものなら、英会話教室、実際にオーストラリア人に来て頂いて活動しております。2つ目は年中行事です。これはいわゆる彼岸法要、正月忌法要をやっております。3つ目は、毎年恒例の、昔からずっとやっているお茶会や年に一度写仏をやっている感じですね。

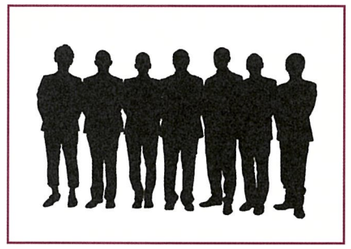
野乃部 私も自坊の話ですが、私のお寺の住職がとてつもないイベント好きでして、ヨガ等といったものは大体やってきております。他にですと、そうですね、真言宗ではカラフルな法衣等が色々あって、最初の頃はお坊さんのファッションショーといった宗教色のあるイベントを多くやっていたんですが、最近はコンサートやフリーマーケットといった宗教とは無縁のイベント等もやっております。他にはHPを作っており、またSNSも使ってます。HP上ではPDFファイルで新聞をダウンロード出来るようにしたりもしています。あとは、三年程前にNPO法人を立ち上げましてなんでそうしたのかと住職に訪ねると、政教分離等の関係でお寺の名前だと、広報誌等には載せてもらえないのですが、NPO法人を一つ噛ませると、活動しやすいということで立ち上げておるそうです。またこのNPOの活動が地域の方との関わりに繋がってきております。

徳永 年中行事は色々行なっておりますが、日蓮宗にも青年会がありまして、四十歳ぐらいまでの若い世代の僧侶が、皆でお寺を一緒に盛り上げるという活動をしています。夏なんかには二泊三日の林間学校を毎年行っていまして、小学一年生から中学三年生の地域の子ども達が毎年大体百人くらい集まります。他には、地元の中学生が体験学習ということで年に数回お寺に訪れることもありますし、震災後の復興活動も行っております。皆さんと同じようにHPも開設しております。

根来 お聞きしたいんですが、龍谷大学でも今度お坊さんのファッションショーをしようという企画がありまして、その対象は若い世代で、しかも全然仏教に触れたことのない人達に少しでも壁をなくして欲しいという思いでやるみたいなんですが。野乃部さんがファッションショーをされた時に来られた方はどういった年代の方だったんでしょうか？

野乃部 その時は檀家さんにしか告知をかけなかったんですが、今では町の人とかでホームページ等で来たいと言われる方にはお越し頂いています。当時はまだイベントをやり始めて間もない頃だったということと、基本的に檀家さんにしか告知しなかったということもあり、来られた方は檀家さんだけでしたね。

鈴木 出演者は何人ぐらいいたんですか？



野乃部　出演者は大正大学で人を探しまして。堂僧等といったおじさん達に出演して頂くよりは若い人の方が良いだろうということで大正大学に出演者募集をかけました。十人くらいの方に来て頂いたと思います。

根來　法要等もそのファッションショーの時にされたんですか？

野乃部　法要とかはしなかったです。実際、お坊さんのことって、皆さん背中から見るじゃないですか。だから法衣がどうなってるか分からない。だから、前から見せたり衣をひっくり返して見せたり、ここはこうなってるんです！って説明したりしました。

鈴木　私は東京にお寺があって、東京で活動しているとやっぱり、なかなか人が集まらないと言いますか、地域密着的な感じにはならないんです。なので人集めに苦労すると言いますか、東京ではなかなか人が集まらないという実情がありまして、地方でそこのところはどうなんでしょうか。

根來　どこからが地方なんですかね？笑　僕は大阪でも岸和田っていうところで、大阪と言うにはちょっと田舎っぽいところでして、ちょうど今古い家が壊れていって、新しい家がバンバン建っていってて、形態が変わって行ってる気がするんです。うちのところだけかもしれませんが。今までは脈々と続いてきた家の宗教・宗派等があったような気がするんですけど、それが今、途絶えてきていて、完全に家ごとが独立して建っているような感じになってます。地域のコミュニティ自体が薄れてきているような感じなので、僕の家のまわりは、結構同じように人が集まらない状況になりつつあるんかなという感じですね。

鈴木　やはり最近はどこも若者が集まらない状況なんですかね。ファッションショーとかをしたら若者が集まったりするんですか？

野乃部　若者が集まるか集まらないか、と言うと集まらないです。やっぱり仕事バリバリの檀家さんの息子、みたいな人達はだいたいベットタウンに引っ越しちゃってて、地元には住んでないという感じで、来る人はすごく熱心な方達です。

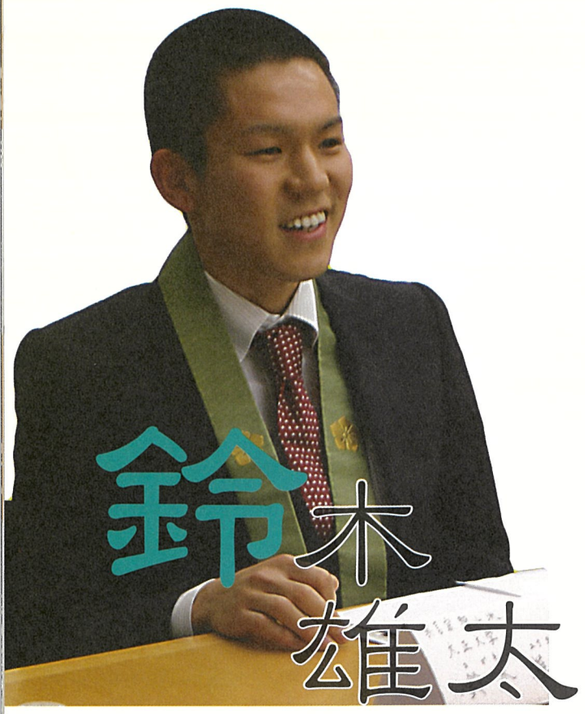
―ではここからは、以上の活動を踏まえた上で寺院はこれからどういう活動をしていくべきだとお考えか、お聞かせ下さい。

鈴木　これからということに限らず、お寺は人々の心の拠り所となる空間であると思っていて、その時代にあわせた人々の宗教的ニーズにどう応えて行くかということだと思うんですけども。大事になるのが伝統と創造と言いますか、こう脈々と受け継がれてきたものが仏教にはあるはずなのでその残すべき伝統は残して、変えるべきところは思い切って新しく創造していくということがこれから大事だと思います。伝統は何を残すべきなのか、そして新たに何を創造し変えていくべきなのか、そこをしっかり考えて時代と対話しながらそれぞれ活動していき、結果を残していくことが大事なんだと思います。

徳永　私は実は日蓮宗関係の方向で宗教の授業を担当させて頂いていたんですが、高校二年生で宗教についてという授業をやりまして、まぁ一番最初の授業で「あなたにとって宗教とはどんなものか」というような作文を書いてもらったら、やっぱり宗教っていうのは怖いとか近づきたくないとか、そういうイメージをもっている方がほとんどという感じだったので、それを見た時にやはり宗教ってどういうものかということを、きちんと伝える必要があるなと強く感じました。もちろんそれは簡単に「宗教というのはこういうものだ」ということを教えられるわけでもないなと感じておりまして、今お寺からは離れて生活していますが、やはり後々お寺で住職になったときには、そういった中学生・高校生くらいの子を集めて、お寺とはこういうとこ、宗教とはこういうものだっていうことを伝えていければいいなと感じています。

根來　若い世代もそういうイメージがあるんですね。国学院の宗教意識調査プロジェクトで、オウム事件以降宗教は怖いものだと答える方が一段と増えたという風には聞いていましたが、当時まだ幼かったはずの今の若い世代でもそういったイメージを持ってはるんですね。

秋田　私は茨城にお寺がありまして、関東ですけど地方寺院でありまして、さらに今ベッドタウンになってるんですね。自坊は古い街の中にはあるんですけども、だんだん過疎化していっていて、家も少なくなっている。けれどベッドタウンになってますので、住民が増えているわけで。そしてその方たちはわりとお寺っていうものを欲っしていると思うんです。東京から安価な土地を求めてやってきて、知らない土地で、例えば子供の集まるところ一つ考えても、探しているんですね、そういう場所を。その人たちのニーズに応えられるようにお寺を開放していかなきゃいけないと思うんです。入りにくいお寺っていうのは、入らないんですよ。私も僧侶ですが、門が閉まってたら入らないし電気がなかったら入らない。怖いですから。だとしたら、街灯をたてたりだとか対応していかないと。あまりにも暗いお寺が多いと思うんですよ。門が閉まってるのもあれなんですけど、提灯ですか、灯明がたっていないだとか、本堂の正面が閉まっているだとか、そうなるとお寺にお参りにきて、ここのお寺の本尊はなんなのかなーとか、そういうのすら見えない。縁起も書いてない。とすると二度とそこには来ないと思うんですね。もう少し、正面くらいは開けて、まあ変な人が入ってきて困るんだったら格子窓を付けるだとか、そういうことをしないと。このお寺はこうですっていうのをオープンにしていくのが参拝者を集める第一歩であって、そこで人が来て、たびたび来るようになって、そこでまた布教でもいいですけども、自分の想いっていうか、お寺の有り方を発信していくっていうふうに私は自分で思っているんですけども。



安孫子　お寺は敷地が大きいですから、講演とか教室とかイベントごとを色々やってらっしゃるんだと思います。でもそういう場として、どこまでお寺を使っていいのかなっていう疑問がありまして。また入り辛いという神聖な感覚がお寺の醍醐味でもあり、背筋がピンとのびるような感覚というのは忘れちゃいけないのかなと思います。あまりにも世俗化するというか、日常の空間になっていいのか、非日常の空間にするのか、っていう。お寺のもつ神聖性みたいなものがなくなってくるっていう一種のジレンマみたいなものが、お寺の開放にはつきまとってきますよね。それはもちろんHP開設とか、SNSとかで発信していくっていう部分も良いんですけど。私はやっぱり、原点にかえってというか、色んなイベントごとをやっていくのは良いと思うんですけども、ただ日常の勤行とか、お寺に入ったら境内が奇麗に掃除されているとか、お香の良い匂いがしてくるとか、そういう雰囲気作りのようなものが非常に必要なんじゃないか、足元から見ていくってことが重要なんじゃないかと思いますね。

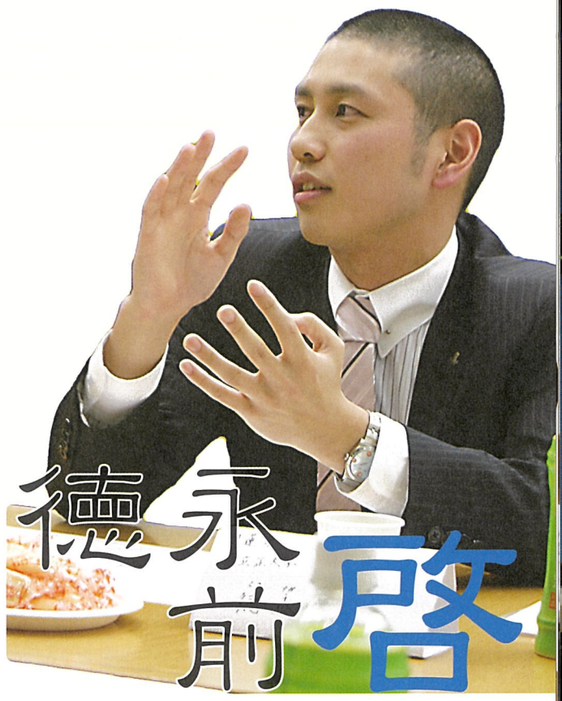
鈴木　お寺っていうのは元々寺族のものとかそういったイメージがあると思うんですけども、そうではなくて皆のものっていうのがお寺の有り方ではないでしょうか。住職のプライベート空間ではないというのであれば、どこまでオープンにして良いかっていうのは、いくらでもオープンにして良いと私は思います。ただどこまで世俗化するかという問題になってくると、お寺でやるヨガ教室と公民館でやるヨガ教室とではやっぱり違うと思うんです。そういった世俗化したイベントを、綺麗な敷地で、お香の匂いを嗅ぎながらやっていうところがポイントなんではないでしょうか。入り口は世俗化させておいてその裏に背筋がピンとなるようなものを作り上げるという部分に重きをおいて。

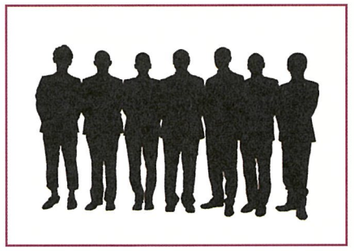
根來　本日来て頂いた方は皆同じ様なジレンマにかられていると思うんですけども、僕もイベントをしたりだとかそういったところに宗教的な空間って必要やと思うんです。例えば、どんちゃん騒ぎしただけで皆帰ってしまったでは意味がないと思いますんで、例に出しやすいのはヨガ教室なんですけど、知り合いのお寺は電気消してロウソクだけでやろう、みたいにやってるみたいで、別のお寺では塾を経営されてる方がいて、塾で子どもたちが来た時に、塾って勉強するところですから宗教のことを聞きに来ているわけではないんですけども、必ず一回本堂の中を通すらしいんです。その後に教室に行かせるらしくて、それだけでもなんか皆入る時は、ちょっとおじぎして入るという形が出来上がっているらしくて。これから大事なのはそういう、僕たちのジレンマをどう溶け込ませるか、ではないでしょうか。無茶なことをしないといけないと思うんですけど、宗教的空間を重視し過ぎても来てくれないので、俗における聖の確立がすごく難しいと思います。

鈴木　お寺に限らず、知らないところにいきなり飛び込んでいくっていうのは難しいことですよね。変にお寺だからっていうことよりも、知らないところに一人で飛び込んでいくっていうこと自体大変でして、一度来てもらえれば、とは思うんですが。例えば私達も趣味で何かを習いに行くってなると、最初は行き辛いなって思いますが、向こうがいつでも来て下さいという雰囲気を出すと、また二回目三回目行くっていうのはよくあることだと思うので、そういう意味で敷居を一回さげて、人を集めるというのは非常に重要だと思いますね。

―続きまして、「寺院の必要性はどこにあるのか」についてお聞かせ下さい。

根來　必要か必要じゃないかと言えば必要であると思います。なぜ必要かというと、子供の代に宗教を受け継ぐ場として必要と言えるのではないでしょうか。子供が自然と教えを聞ける場としては、寺院以外では難しいかと思います。





安孫子　まず何を持ってお寺とするのかっていうのが。例えば、ビルとかのお寺ってあるじゃないですか。ああいうお寺の必要性と、田舎にあるような本堂がしっかりあるお寺の必要性って全然違ってくるような気がするんですね。また、お寺を箱として見るのか、仏教の必要性みたいなテーマになってくるのか。単純に寺院っていう建物の空間が必要かって言われると、私は必要じゃない気もしますね。それとお寺の多さは気になります。密集している地域ってありますよね？そういうところにお寺が一つしかないのはダメなのか？と言われると、いやダメじゃないなっていう気がします。必要性って外から規定するんじゃなくて、この寺の住職がどう考えるのかっていうのが必要だと思うんですね。住職は寺がなかったら生きていけないわけじゃないですか。だから必要性ってのをある意味作り出してしまっているだけだと。必ず必要のかって言われたら、住職がいらなければいらないで良いんじゃないかっていう結論になってしまうな、と思うんですけどもどうでしょうか。

根來　それだとお寺がなくなったり少なくなったりした時に、どうやって仏教が伝わっていくんだろうという疑問があります。僕の中では伝わり方として、お寺で法話を聞いたりという風に思うんですが。

安孫子　ないところには全然なかったじゃないですか、お寺って。あるところには固まってある。バランスよくあるほうがいいんじゃないかなと。

秋田　やっぱりそれは地域性ですか。東京とかはお寺が密集してますし、たとえば地方の場合はもっと距離が離れてたりするわけで、それでバランスよくってのは、関係ないのかなとは思います。

―こうは考えられないでしょうか。お寺ではなく法があればいいんじゃないかと。

鈴木　象徴とかイメージっていうのが絶対にないと法は伝わらないんじゃないかと思います。大正大学にいるとよく分かるんですが、一般の人が黒板で先生の授業聞いてても、あんまり仏教のこと分かんないし好きにならない。でも一回お寺に行ってみるとお寺の良さって絶対伝わってくると思うので、いくら黒板で仏様って言われてもそこまで実感がないけど、お寺に行って本尊の前で誰かいじめてみろとか悪口言ってみろと言われたら、多分出来ない。そういう意味で象徴とかイメージとしてお寺を残すっていうのは必要じゃないかなって思うんです。

安孫子　じゃあ、ビルとかのお寺は必要ないってことですかね？

鈴木　必要ないってことはないですけど、ビルよりはイメージとしてのお寺のほうが印象として良い。でも、ビルだろうとお寺だろうと、象徴がないと法は伝わっていかないんじゃないかなと。

根來　質問なんですが、皆さんのお寺の御門徒さん（檀家さん）の家にお仏壇はありますか？

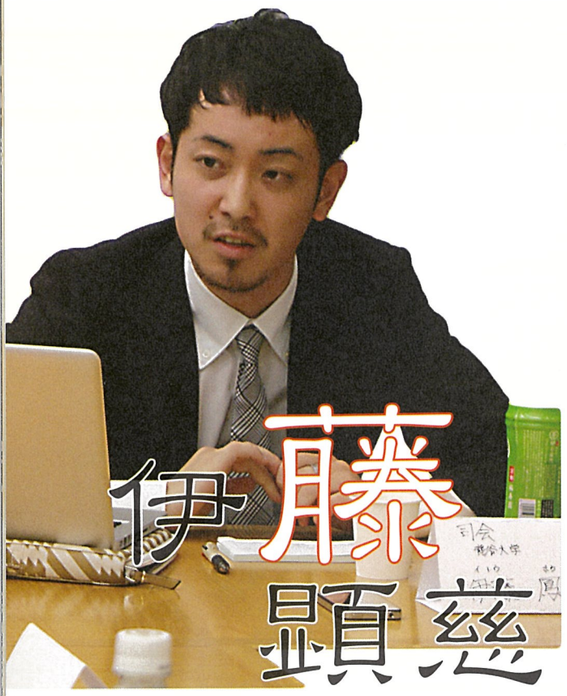
安孫子　あるお檀家さんのほうが多いですね。ほとんどの家にあります。

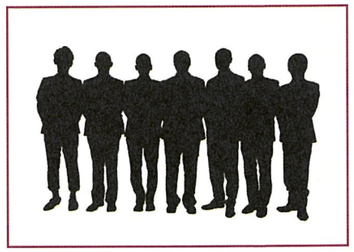
根來　そこに御本尊があるのであれば、先ほどの話だと家でも良いんじゃないかと思うのですがいかがでしょうか？

鈴木　家でお母さんが作ってくれたハンバーグはいつも食べてて、それはそれでおいしい。でも今日はお洒落しておいしいフランス料理でも食べに行こうっていうのとでは感じ方が違う。日頃の象徴はもちろん仏壇であって良いと思いますが、やっぱり大きな元の心の拠り所となるシンボルといいますか、そこはお寺が担うべきじゃないかなと思います。

秋田　自分が何か悩んだときに、教えて欲しい人がいる。それがお寺の住職であると言うのであれば、お寺は必要でしょうね。自分で一人考え込んでしまうよりは。

徳永　お参りという形でお寺にいくのに加えて、やっぱりお坊さんに会う。住職に話を聞いて欲しいというようなことで、さっきもお寺が近い遠いとかあ





りましたけど、それだったら近いお寺に行けば良いのかもしれないですけど、自分はこのお寺に行ってこの住職と話がしたいとかっていう人もいるのかなと思います。お寺＝住職。住職を見ればお寺が見えるというか、やっぱり住職が大切。住職っていう人間が魅力的であればっていう感じ。

安孫子　やっぱりお寺を選ぶべき。お檀家さんが選んでいかなくちゃいけない。今は檀家制度ってほどじゃないですけど、やっぱり親が、先祖代々のお墓とかがあるからそこのお寺っていう感じじゃないですか。そうじゃなくてやっぱりこれからは、お寺は選ぶものであるべき。

徳永　お寺にお墓がある。元々そのお寺の檀家。で、そのお寺の住職と会って話して、コミュニケーションをとっていくと、住職と檀家との結びつきっていうのが深まっていくでしょうし、もしそこで住職が自分とは合わないとなると離れていくのかなって思います。

秋田　私のところは少し状況が違いそうなんですが、うちはお墓なし、檀家なしの信者寺です。なのでお寺に来る人達っていうのは、皆さんのところとは違うんですね。いわゆる信者さんの場合は檀家ではないので、もちろん檀家寺はないですし、お墓は別のお寺にある。でも信仰されてうちのお寺に来るので、若干みなさんと立場が違います。

徳永　私も檀家がいない信者寺といいますか、祖母がお寺を開いたんですけども、檀家は別のお寺で宗派も違う。

根來　信者さんは特定のお寺に教えを聞きに行くんではなくて、複数のお寺に聞きに行ったりもするんですか？

秋田　はい。この前あそこに行って来てねえ、とかいう方はいらっしゃいます。

根來　そこにお寺の本来の必要性があるって感じはしますね。

安孫子　純粋な形でお寺の必要性が見られる気がしますね。来てる信者さんに「どうして来られたんですか？」って聞いてみたい。

秋田　根本的なことを言ってしまえば、たとえどんな理由であれ、その方が来られたっていうのは恐らく何か縁があったんでしょうから、私としてはなんでこれだけお寺の数がある中で、わざわざここのお寺を選んだのかなっていうところを、お寺の住職が考えなくてはいけないと思います。隣のお寺でもいいのに、ここに来てくれたってのは何か…あるのかなと。

―最後に超宗派（以下 TSH）「彼岸寺」についてお聞かせ頂けたらと思います。

秋田　彼岸寺って何ですか？

鈴木　宗派とか関係なく、同じ目的意識をもった人が集まって何かやっていこうっていう。

野乃部　何かっていうのは？

―皆でホームページを閲覧―

安孫子　彼岸寺に集まったらもう何宗とか言わないってことですか？

根來　言ってますね。

安孫子　だったらあんまり意味がないんじゃ。法要とかするのでも難しそうですね。

―法要等ではなく、入り口として間口を開いて、いろんな人に興味をもってもらおうとするのが恐らく彼岸寺ではないでしょうか。

安孫子　総合商社みたいなことになって、結局末端までいけば何宗ってなっちゃってるかたちですか。

―TSH に限ったことではありませんが、近年、宗教がカルチャー化している様に感じます。もしくはエンターテイメント化ですか。信仰がなくなってきているのではという心配があります。仏教という土台の上に様々なコンテンツを乗せていくべきだとは思いますが、近年の主流としては、あらゆるコンテンツという土台の上に仏教を乗せている様に見え、順番が逆になってしまっているんじゃないかと。ベクトルが信仰ではなく、「仏教でこういうことをやったら面白いんじゃないか？」という風な「本質を見失ったプロセス」ばかりに気がいっている様に感じます。

秋田　そしたら、先ほどから出ていましたファッションショーなんかも、そういうことなんじゃないですか？それをきっかけに宗教に、っていう。

根來　彼岸寺に iPhone を手にもって合掌している

写真が載ってますが…、理由が何であれ手を合わせる行為にiPhoneっていうのはちぐはぐな雰囲気を感じます。

秋田　今はネット上にお墓があったりしますね。

安孫子　信仰に繋がらなければ意味はない。

鈴木　TSHの目的意識はもちろんそこにあると思います。これを否定されてしまうと、やっぱりファッションショーとかでも結局同じことといいますか、仏教系以外の全ては同じだと思うので、それがたまたまネット寺院っていうやり方であったのでは。

秋田　同じですよね。

安孫子　さっき世俗化のジレンマとかもありましたけど、どこで線を引くのかっていうのが。

秋田　HP等が主流な時代なので、それを利用したというのは、一気に仏教が広まって、メディア等にもバンバン取り上げられて、またしっかり修行もなされて、信念をもってやっているというのは良いのではないでしょうか。そこを否定してしまうと、僕らの諸活動も否定することに繋がってしまうのかなと。

安孫子　TSHとこの彼岸寺の問題は、ちょっと違う様な気もします。やっぱり宗派間で協力して何かやるっていうのは、それは別にネット寺院とかじゃないですけど、僕もTSHでやってる活動があり、そこでは宗派の色は出さないというか、袈裟も会内のものを使用します。法要は宗派混ぜるとごちゃごちゃになってしまいますからそれぞれの形式でやるんですが、運営は全然宗派色出さずにやるんです。そういう取り組みは、もっとやっていくべきだと思いますし、地域でのTSHっていうのは大事じゃないかと。宗派というくくりじゃなくて、地域っていうくくりでやっていくってのは大事だと思います。宗派をまったくなくしてしまって一つの寺院を作るっていうのは難しい気がしますが。

鈴木　さっき言ってたのがすごいわかりやすく、仏教の上にエンターテイメントがくるのか、エンターテイメントの上に仏教がくるのかっていうのは、すごい大きな問題で、重要なのは仏教の上にエンターテイメントっていうのが条件かなと私も思います。

安孫子　そこの判断っていうのはどうするのかなと。

鈴木　そこは、本人の目的意識に委ねるしかないですかね。

根來　判断は難しいですね。例えば美坊主図鑑はエンターテイメントの上に仏教というカテゴリを乗せてしまっているような気はしますが…、制作者側がどのような意識をもって発行に至ったのか気になります。

安孫子　このネクタイ、阿弥陀様の梵字なんですよ。これはエンターテイメントに分類されるんでしょうか？

根來　それはネクタイというものの上に仏教要素を加えた、と考えて良いんではないでしょうか。

秋田　私もエンターテイメント化していくっていうのは少し抵抗があります。けれど昔からエンターテイメントの場として、お寺を提供するってことはあったことですので、それはさっきのファッションショーじゃないですけども、そういうのはありだと思うんです。

鈴木　やる側が考えないといけないんですね。

安孫子　美坊主図鑑等で人の注目を浴びさせることが第一歩なんだっていう考えは、それはそれで分からなくもないです。そこを入り口にお寺へ来る人もいるだろうし。

聴講者：浄土宗修士一年次生

秋田　そうゆう面もある、と。

安孫子　だから結局、お寺らしさだとか本堂の荘厳だったりとか、そういったものがだめだから、今現代に通用しないから萌え寺とかが出てくるという発想なんだと思います。でも私は今まだ（古くからのものは）通用すると思うんですよ。元々あったお寺の荘厳とかをエンターテイメント性っていうとするとならば、それに充分我々は力を注いでいるのか、必死に頑張ったけどだめだからこっちなのか、こっちが全然頑張れてなかったけど見栄えの真新しさを求めてこっちを選んだりだとか、まあ注目を浴びるためだけに、こういう方法を選ぶのはだめだと思うんですが。本業を、まさにお寺らしさってのをとことん追求していって、でもやっぱり人が集まんないとか、そういう風になった時に初めて、こういうエンターテイメントな現代のカテゴリ、要素を乗っけていくっていうのは致し方ないのかなと思いますね。

徳永　きっかけとしては、私は賛成のほうの立場で、美坊主図鑑とかどんなお坊さん載ってんだろうっていって見て、こんなお坊さんいるんだ、会ってみたいなって、実際お寺に行って実際話をしてみてっていう、お寺に行くというきっかけとしては良いのかなと思います。それで行ってから、迎える側としてどういう風にしていくかという、迎える側がそこできちんと、癒しを求めて来たなら癒しを出来るかというところなんではないでしょうか。

鈴木　エンターテイメント化して頑張ろうとしている人達は、本業をしっかりした上で、その本業にしっかり結びつけるベクトルでエンターテイメントっていうコンテンツをやっていると思うんです。で、逆のその今、お寺離れとかって言われているのは、本業はいかにもしっかりやってますみたいな空気を出して、日常生活を見てみると完全にエンターテイメント化しているみたいなお坊さんっていうのは案外多いのではないかなって思います。むしろそっちの方向をどうにかしないといけないというか、多分大正大学に入って他の学科の人達はお坊さんのイメージがガラリと変わってほとんどの人が悪い方にいったんじゃないかと思うんです。そういったところを真剣に、お坊さんの日常生活のエンターテイメント化をどうにかしないといけないのかなと。

安孫子　そういう人ってあんまり数多くはいないと思うんですが、そのせいで全体がそうなのかっていう風になるのは、如何なものかと思います。そう考えると、我々と関係ない問題だとは言えないかもしれませんね。

—ではここで、聴講の方から何か質問等がありましたらお願いします。

聴講者　質問ですが、お寺の住職が教えてくれる、悩み事に応えてくれるっていう様なことをおっしゃっていましたが、一般の人はどうしたらお寺の住職と会えるんでしょうか。そこにお寺があって、構わずノックして住職と会わせて下さいと言ったら入れるんでしょうか？

秋田　うちは入れますね。

安孫子　うちは難しいですね。住職のいないお寺が多いんではないでしょうか。忙しくて住職が今

野乃部　張り紙なんかはしますね。結構フリーマーケットとかだと、町の人に来てもらいたいので商店街の人とかにも配ったりしています。

安孫子　やっぱり一般大衆が見える様なコンテンツに発信していかないと、まったく意味がないんですかね。

野乃部　それ以外出来なくないですか？大きな祈祷寺等でない限り。僕らのレベルでいったらＨＰか町のポスターか、です。

安孫子　それで十分だと思います？

野乃部　あとは口コミですよね。友人を連れて来て下さる方もいます。

根來　うちは花祭りとかをする時は地元の文房具屋さんとか駄菓子屋さんにお願いして、子供達に楽しいイベントがあるよと渡してもらって、親用の紙と子供用の紙を駄菓子屋さんに渡しておいたら当日３００人程度の親子が来てくれはって、普段は日曜学校っていって日曜日に子供の勉強会みたいなのをやっているんですけど、それは５人くらいなんですよ。崩壊寸前なんですけども、花祭りもあまり人数が来なかったんですけども、それをやってみたらなぜかどこにおったんやってくらいの人が来まして、まったく存じ上げないような子供がなぜか手を合わせて帰っていくっていうことがあったので、地域に密着したような宣伝の方法が、変にお金をかけて宣伝するとかよりも意味があるかと。

安孫子　そんなに大きくないお寺だと、結局来るのは地域の人ですよね。

鈴木　それで十分じゃないんですかね。地域の人に来てもらえれば。

安孫子　うん、だからそういう方向が一番いいのかなっていう気はします。

秋田　でも結局、お寺に行ったら誰もいないじゃ困るわけじゃないですか。だから住職、もしくは住職に変わる僧侶がいるべきだと思うんですね。せっかく来て頂いたのに、住職がいないとここに来るのやめようっていうのでは、そこで私達のほうから縁を切っていることになるので、やっぱり「住職」なんですから、そこに誰かいなきゃいけない。ブザーおして誰も出てこないっていうのは、それこそお寺の意味はないと思いますね。

安孫子　そこにいけば必ず住職がいるってゆうのがある意味、お寺の必要性・存在価値なんじゃないかと思います。

石川（書記）　月参りされてるお寺なんかは関西で多いと思うんですが、そうなると住職がお寺にいつもいるという状況は難しいんじゃないでしょうか？

根來　うちは坊守が常に家にいるんですけども、男性の方が先に亡くなられるご家庭が多い気がするんです。お寺に足を運んで来る方ってなぜか女性が多いような気がしまして、そうなると坊守が居てる方が逆に安心するって言うてくれる方もいるので、うちは坊守が必ずお寺にいるようにしてます。もちろん僧籍をもった坊守です。

安孫子　うちは寺庭婦人の方がむしろ人気がありますね。

野乃部　たしかにうちもお彼岸とかでおばあちゃんが、もう九十歳くらいなんですけど、やっぱり会いたいって人がいますね。お話しがしたいそうです。住職が不在としても、せめて寺族がいたほうが良いのかもしれません。

鈴木　大事なのはいつでも来て良いということを発信しておくってことだと思います。誰かが居て来やすい雰囲気を作っておくということが大事なのかなと。

秋田　今は一人一人が何かを選び点数をつける時代です。人が宗教を選ぶように、寺院も選ばれる時代なのではないでしょうか。エンターテイメントからの仏教の発信というのも、是非はあれども必ず何かのきっかけなる筈です。むしろ、そういった活動をしようと思う志を評価していきたい。

安孫子　皆さん色々な取り組みをお寺でやっているんだなあ、と驚きました。もっと色々な宗派や寺院形態を持つ僧侶等を集めると面白いかもしれません。

鈴木　このような機会はなかなかないので、それこそ「ISH」で若い僧侶が何かすることは大切なことだと思いました。話が少しまとまり辛かったので、もっと細かな段取りや事前連絡を徹底すると良かったかもしれませんね。一般学生を混ぜてみても面白かったかと。

野乃部　あまり宗派の色の出たところが少なかったように思います。せっかく宗派別で集まったのですから、もっと宗派独自の活動等、色の出やすい質問を用意しておくと良かったかもしれませんね。「寺は必要か」の質問は答えが出し辛かったです。

徳永　色々な宗派の方とお話をさせて頂きとても刺激を受けました。改めて、寺院とは本来修行の場であり、学問探究の場だったなと感じました。これからの寺院のあり方は同時に、これからの僧侶のあり方でもあるんですね。宗教とは、お寺とは、ということを広く社会に発信していくべきなんだと思いました。師匠のお寺の方に言われた言葉を思い出しまして、「お坊さんだから偉いとかでなく、人間的に魅力的な僧侶になれ。」またこのような機会がありましたら、是非よろしくお願いします。

— 以上。ありがとうございました。

会場協力／大正大学
〒170-8470
東京都豊島区西巣鴨 3-20-1
TEL：03-3918-7311

— 対談は以上になります。最後に一言ずつ頂けたらと思います。

— 浄土真宗では住職の奥さんのことを「坊守」と呼びます。

出れないとか。うちの場合は率先しては出たがらないです。まずお前が行って来いと。怪しい人だったら返せみたいな感じのお寺も多いと思います。そしてそれは良くないことだとも思いますね。

聴講者　私が思うには、お寺に行けるとか、住職に会えるとか開放されてるとか、いろんな諸活動をされていることを知らない一般の方がすごく多い様に思います。もちろん檀家の方はお寺のスケジュールとかは知ってますから、お檀家の方はいらっしゃる。信者寺は信徒の方がいらっしゃる。じゃあその他不特定多数の一般の方はそういうことをどう知れば良いのでしょうか。インターネットで、寺でこういうことがやってますって、御法事の事はいっぱい書いてあっても、あんまりその、エンターテイメントは先ほどから後付でも良いとおっしゃっておりますけど、そういうことをやってるってこと自体知らない人が多いと思います。

野乃部　うちのＨＰではイベント情報ってとこにイベントが何日にありますっていうのを載せてます。あとはＳＮＳとかで流したりしてます。

安孫子　お寺で告知とかはないんですか？

JISSEN × snap

実践真宗学研究科に所属する学生達を見れば、その研究科の実態が見えてくる。
彼達彼女達の年齢や研究テーマは様々で、こうして切り取って見てみると、実践真宗学研究科の色が見えてくるのではないだろうか。

Illustration : Satoko Uryu　Photo : Toshitaka Naka　Design : Kenji Ito

山本　成美（25）
実践真宗学研究科
三年次生
□研究テーマ□
「視覚伝道の可能性」
～寺報・フリーペーパーを中心に～

巣山　普照（23）
実践真宗学研究科
一年次生
□研究テーマ□
「心理学的視座からの真宗実践について」

藤田　圭子（25）
実践真宗学研究科
三年次生
□研究テーマ□
「浄土真宗における青少年への伝道の可能性」
～伝道のためのネットワーク構築の必要性について～

伊藤　顕慈（27）
実践真宗学研究科
一年次生
□研究テーマ□
「現代社会における浄土真宗の信仰意義」
～一世思想と三世思想より～

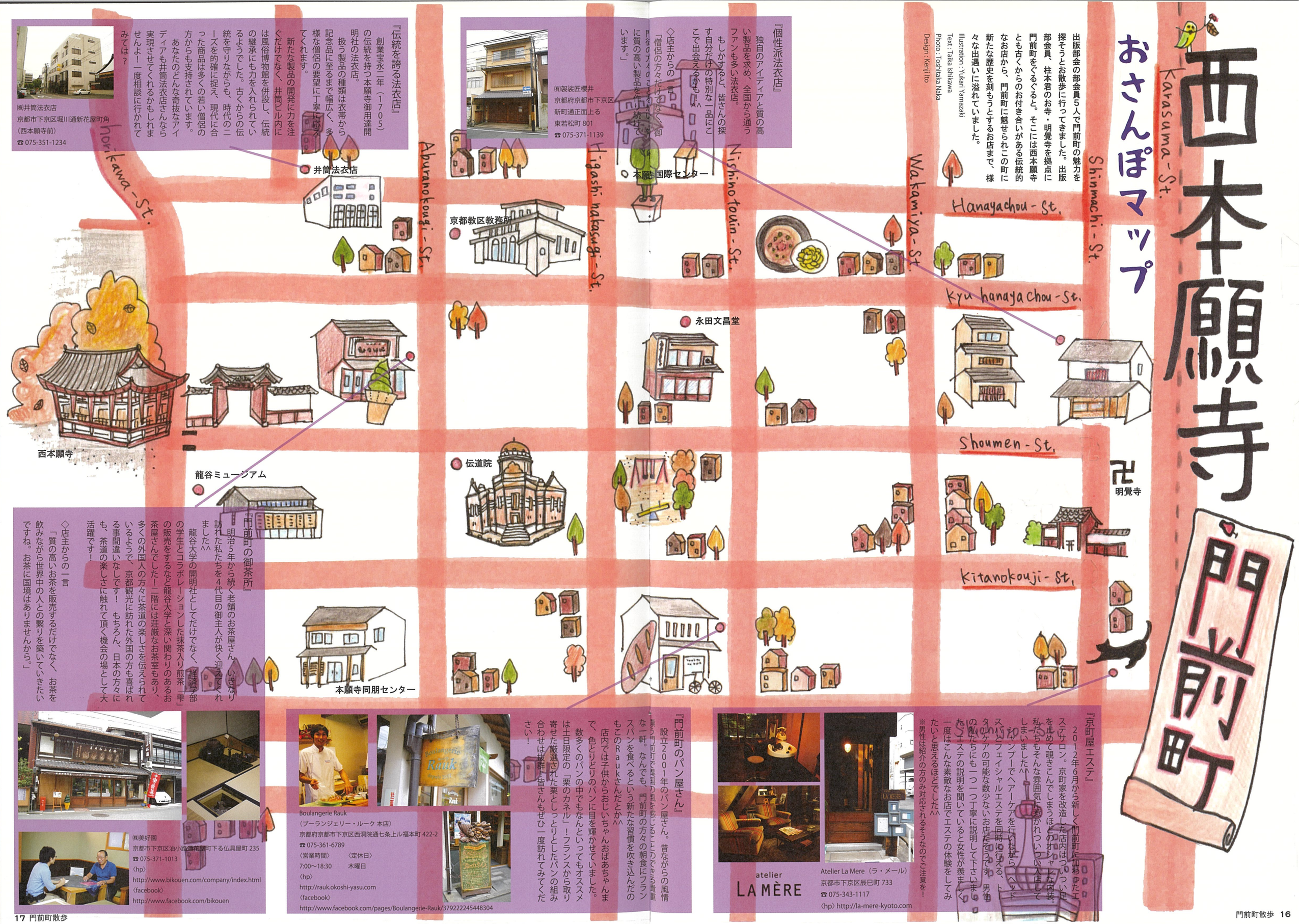
田中　至道（24）
実践真宗学研究科
二年次生
□研究テーマ□
「仏教と医療」
～患者の苦しみを中心として～

西本願寺 門前町

おさんぽマップ

出版部会の部会員5人で門前町の魅力を探そうとお散歩に行ってきました。出版部会員、柱本君のお寺・明覺寺を拠点に門前町をぐるぐると。そこには西本願寺とも古くからのお付き合いがある伝統的なお店から、門前町に魅せられこの町に新たな歴史を刻もうとするお店まで、様々な出遇いに溢れていました。

Illustration : Yukari Yamazaki
Text : Taiko Ishikawa
Photo : Toshitaka Naka
Design : Kenji Ito



『個性派法衣店』

独自のアイディアと質の高い製品を求め、全国から通うファンも多い法衣店。

もしかすると、皆さんの探す自分だけの特別な一品にここで出会えるかも!^^

◇店主からの一言

「僧侶の方々だけではなく、御門徒のみなさまにも、喜ばれる、御に質の高い製品を作り続けています。」

㈲袈裟匠櫻井
京都府京都市下京区
新町通正面上る
東若松町 801
☎075-371-1139

『伝統を誇る法衣店』

創業宝永二年（1705）の伝統を持つ本願寺御用達開明社の法衣店。

扱う製品の種類は衣帯から記念品に至るまで幅広く、多様な僧侶の要望に丁寧に応えてくれます。

新たな製品の開発に力を注ぐだけでなく、井筒ビル内には風俗博物館を併設し、伝統の継承にも力を入れられているようでした。古くからの伝統を守りながらも、時代のニーズを的確に捉え、現代に合った商品は多くの若い僧侶の方からも支持されています。

あなたのどんな奇抜なアイディアも井筒法衣店さんなら実現させてくれるかもしれませんよ!一度相談に行かれてみては?

㈱井筒法衣店
京都市下京区堀川通新花屋町角
（西本願寺前）
☎075-351-1234

『門前町の御茶所』

明治5年から続く老舗のお茶屋さん。いきなり訪れた私たちを4代目の御主人が快く迎えてくれました^^

龍谷大学の開明社としてだけでなく、経済学部の学生とコラボレーションした抹茶入り煎茶「雫」の販売をするなど龍谷大学と深い関わりのあるお茶屋さんでした!二階には荘厳なお茶室もあり、多くの外国人の方々に茶道の楽しさを伝えられているようで、京都観光に訪れた外国の方も喜ばれる事間違いなしです! もちろん、日本の方々にも、茶道の楽しさに触れて頂く機会の場として大活躍です!

◇店主からの一言

「質の高いお茶を販売するだけでなく、お茶を飲みながら世界中の人との繋りを築いていきたいですね。お茶に国境はありませんから。」

㈱美好園
京都市下京区油小路通花屋町下る仏具屋町 235
☎075-371-1013
〈hp〉
http://www.bikouen.com/company/index.html
〈facebook〉
http://www.facebook.com/bikouen

『門前町のパン屋さん』

設立2001年のパン屋さん。昔ながらの風情漂う門前町で異国の風を感じることのできる貴重な一軒。なんでも、門前町の方々の朝食にフランスパンを食べるという新たな習慣を吹き込んだのもこのRaukさんだとか^^

店内では子供からおじいちゃんおばあちゃんまで、色とりどりのパンに目を輝かせていました。

数多くのパンの中でもなんといってもオススメは土日限定の「栗のカネル」!フランスから取り寄せた厳選された栗としっとりとしたパンの組み合わせは抜群!皆さんもぜひ一度訪れてみてください!

Boulangerie Rauk
（ブーランジェリー・ルーク 本店）
京都府京都市下京区西洞院通七条上ル福本町 422-2
☎075-361-6789
〈営業時間〉 〈定休日〉
7:00〜18:30 木曜日
〈hp〉
http://rauk.okoshi-yasu.com
〈facebook〉
http://www.facebook.com/pages/Boulangerie-Rauk/379222245448304

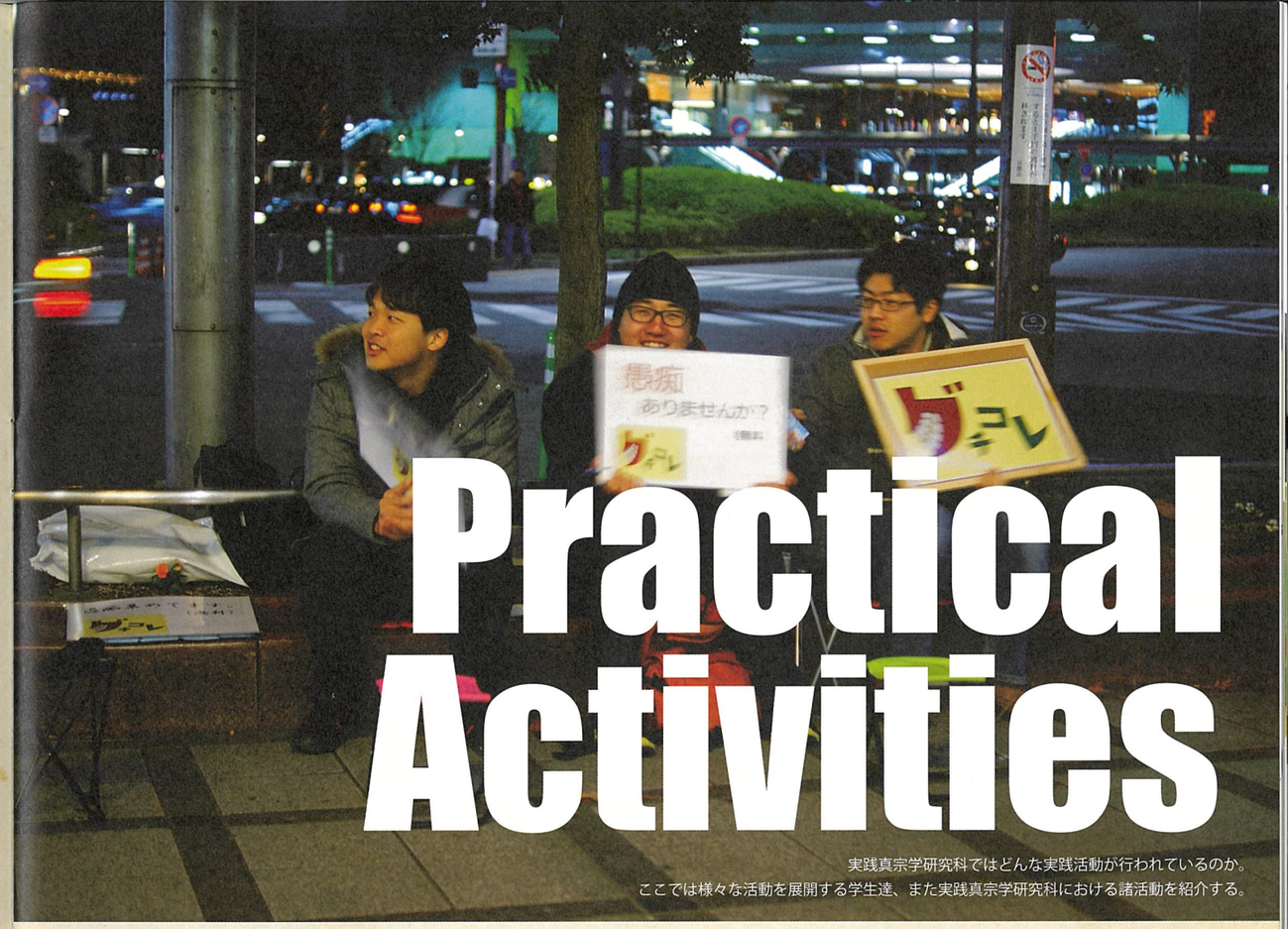
『京町屋エステ』

2012年6月から新しく門前町に加わったエステサロン。京町家を改造した店内はついつい足を止めて覗きこんでしまうほどのオシャレな内装。私たちもそんな雰囲気に惹かれついつい入店してしまいました^^

シャンプーでヘアーケアを行いながらスパとフェイシャルエステを同時に行える、トータルケアの可能な数少ないお店だそうです。男性の私たちにも一つ一つ丁寧に説明して下さいました。エステの説明を聞いていると女性が羨ましく一度はこんな素敵なお店でエステの体験をしてみたいと思えるほどでした^^

※男性は紹介の方のみ対応されるそうなのでご注意を!

atelier LA MÈRE
Atelier La Mere（ラ・メール）
京都市下京区辰巳町 733
☎075-343-1117
〈hp〉http://la-mere-kyoto.com



Practical Activities

実践真宗学研究科ではどんな実践活動が行われているのか。
ここでは様々な活動を展開する学生達、また実践真宗学研究科における諸活動を紹介する。

『グチコレ』

現代社会の大きな問題のひとつとして「抱えた問題を誰にも話すことができない」という孤独さをあげることができる。それらの孤独は一人ひとり異なる物語であり、一様に解決することが難しい。

この活動は浄土真宗本願寺派及び龍谷大学大学院実践真宗学研究科の有志が協力してこれら現代人の抱える孤独に少しでも寄り添い、傾聴し人びとの心に「決してひとりではない」ということを伝えるために行うものである。

（グチコレマニュアル『設立趣旨』より）

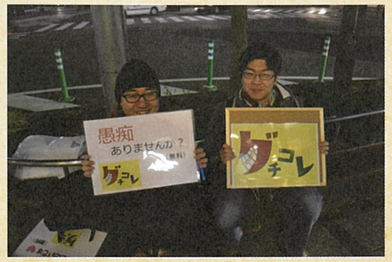
西本願寺より新たなホームページが立ち上がった。その名も「他力本願.net」だ。この新たなホームページの中のコンテンツの一つに、龍谷大学大学院実践真宗学研究科コラボ企画として『グチコレ』がスタートした。代表を務めるのは実践真宗学研究科一年次生の藤原君。そしてグチパンク在籍の実践真宗学研究科一年次生、朋澤君をディレクターに迎え、京都駅近辺にて活動している。活動目的は設立趣旨にもあるように、愚痴という形で噴出する孤独な現代人の抱える問題に寄り添い、傾聴することだという。参加者に対する規約も設けており、

参加者はこの活動に従事することによって傾聴することの重要さを学び、同時に社会に存在する様々な問題に対する広い視点を養うこと。

（グチコレマニュアル『概要』より）

この活動がこれからどのような展開をみせるのか。また西本願寺のセカンドオフィシャルホームページの上での企画であるため、浄土真宗という教団にどういった一石を投じることになるのか。行く末が最も楽しみな活動の一つである。

Text : Kenji Ito　Photo : Toshitaka Naka



【グチコレクター募集】

西本願寺の新たな試みである新ホームページ『他力本願.net』。このサイト内のコンテンツの一つとしてスタートした『グチコレ』では現在グチコレクター（スタッフ）を募集中です。不定期で、平日夜18:00–21:00頃京都駅周辺にて活動。道路許可取得のため、会費として年間数千円が必要となります。興味があるという方がいらっしゃいましたらメールにて件名に「グチコレクター募集係」と明記の上、下記までご連絡下さい。
体験参加者も随時募集中。
〈お問い合わせ〉 r.jissen.publish@gmail.com

『グチコレ』
代表：藤原邦洋
http://tarikihongwan.net/category/collection

『アメリカで仏教を学ぶ』

《米国仏教大学院とは》

龍谷大学の交換留学生として今年の夏から約1年間アメリカのカリフォルニア州バークレーにある、米国仏教大学院（以下、IBS）で勉強させていただいています。IBSは仏教を勉強する大学院で浄土真宗だけでなく、テーラヴァーダ仏教（上座部仏教）、禅やアジアの仏教の歴史またはカウンセリング、チャプレン養成など、様々な仏教に関することを勉強できる大学院です。また、IBSはGTU（大学院宗教連合：宗教系の大学院の連合体）に加盟していることで、キリスト教やユダヤ教の講義も加盟している大学院で受講することができます。

《アメリカでの驚き》

アメリカに来て三ヶ月がたとうとしています。少しはこちらの生活に慣れてきたかな、というところです。IBSの講義は様々な宗教の人が受講していて、とても刺激的です。浄土真宗の入門の講義では、いつもいろんな意見が飛び交います。キリスト教を勉強している方から、「仏教の教えていくと、一体誰が世界を作ったの？」と質問されました。日本の講義ではそんな事聞かれた事もなかったので、とても衝撃を受け、驚きました。この講義には他に禅宗の方、上座部仏教、チベット仏教を勉強している方もいます。先日、禅僧の方が「サンフランシスコにある禅センターのサービスに来てみないか。」と誘ってくださって、サンフランシスコまで足を伸ばしてみました。食事の時間にはみんなで机を囲んで、「いつから仏教に関心があったのか。」や「どうして仏教なのか。」「どうしてキリスト教の牧師なのか。」など宗派、宗教を超えての会話を楽しむ事ができました。

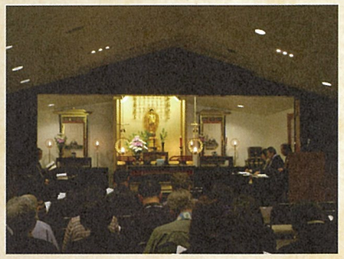
講義中にもディスカッションの中で「どうして僧侶になったのか。」や「なぜ浄土真宗、またはテーラヴァーダ仏教に出会ったのか。」という事をみんなで話す機会もあり、先生自身の経験や生徒さんの想いなど知識だけではない何か、あたたかいものを感じる事が多い講義でもあります。10名程の受講生がいる講義で学術的部分でない宗教のことを、会って間もないクラスメイトに、しかも外国語（英語）で話す機会は初めてで、正直なところ戸惑いもありました。どうして仏教と出会ったのか、僧侶として仏教を、特に浄土真宗をどのように考えているのか、どんな想いで僧侶になったのか、これからどんな僧侶になっていくのか、など自分自身でまだまだ消化できていない部分もさらけだすことになりました。悔しさと上手く伝えられない情けなさと、僧侶としても留学生としても未熟さを感じる瞬間でもありました。しかし、とても感動したのは、講義の終了後にクラスメイトたちが「あなたの話を聞かせてくれてありがとう。」と言って、ギュッとハグをしてくれました。私のつたない英語、まだまだ未熟な考えだとは思いましたが、みんなあたたかく私の想いを受け止めてくれたようでした。

私にとって宗教、浄土真宗に関して心のうちを誰かに話すという事は、簡単なことではない、と実感しています。「あなたにとって、仏教とはどんなものですか。」ということを、真に問われているような気がしました。みなさんはどうでしょうか。母国語である日本語で答えると、どんな言葉でも表現可能なのでごまかしがちでしたが、母国語でない言語、特に英語では曖昧な表現ができないので、はっきりと答えることはできませんでした。また、どうしてそう思ったのか理由もしっかり話さなくては伝わりませんでした。表面だけでない宗教への理解を価値観の異なった人々に話す事は私が想像していたよりもとても難しく、勇気のいることでした。講義の場での学術面を除いた心のうちを語る事は日本ではあまりないので、怖さとあったかさ不思議さが入り交じった不思議な感覚を感じています。

《アメリカの浄土真宗のお寺》

毎週日曜日にバークレーにある、本願寺派のお寺で行われるサンデーサービス（日曜礼拝）にも参加しています。本堂は教会のような作りで、とても落ち着く空間です。サービス（お参り）の後ではダルマスクール（日曜学校）といって大人と子どもがクラスに分かれて、仏教に関する事を1時間程学ぶ時間となっており、大人のクラスは仏教讃歌を歌う事が多いです。日本では聴く機会が少ない仏教讃歌ですが、アメリカの寺院では聞いたり、歌ったりする機会がとても多いです。メロディーがどれも素敵ですので、ぜひ日本のみなさんにも聞いていただきたいです。心がジーンとするような曲もあれば、「天使にラブソングを」という映画で歌われているような、軽快でみんなで手拍子がうてるリズミカルな曲もあります。アメリカにおいてのサービスは「自分が参加している!!」「このお寺の一部なんだ!!」とメンバー（門徒）さんたちが個々に意識する事が大切にされているのかな、と感じています。

こちらに来て三ヶ月、文化、言語全てが日本と違う国で戸惑うこともありますが、そこから学ぶことも多くあり、今はアメリカに留学させていただく機会をいただけた事をとても嬉しく思っています。また、日本にいる先生、実践真宗学研究科の友人や家族に本当に感謝し、またさみしくも感じています。よく言われる事ですが「離れてさらに、有り難さを感じる」ということをこのアメリカの地で実感しています。合掌。



Text/Photo : Kazuha Fujii

藤井 一葉 (25)
Kazuha Fujii
1987.12.26 生まれ
兵庫県出身
龍谷大学国際文化学部
国際文化学科卒

IBS : http://www.shin-ibs.edu/　GTU : http://www.gtu.edu/　龍谷大学留学マンスリーレポート : http://www.mrepo.jp/

ののさま

Text : Jun Hashiramoto　Photo : Toshitaka Naka　Design : Kenji Ito

Gratitude

ファッションショー後に行われた行道では、お経・雅楽・太鼓が鳴り響く中、1万枚の花びらが舞った。花びらが舞う度に無数のフラッシュがたかれ、音の響きと花びらの美しさに耳も目も奪われた。大変派手なイベントで、「仏教＝黒」というイメージを変えることができたのではないだろうか。当日は小雨の中、200名弱の来客があった。また、ファッションショー中に雨足が強まり、屋内に移動せざるを得なくなったのだが、すぐに再開され、その後のプログラムに何ら影響を及ぼさなかったスタッフの対応の早さをここに記しておく。

Our Feelings

「お坊さんファッションショー」あまり聞き馴染みのない言葉ではないだろうか。お坊さんの格好といえば、黒色の法衣に袈裟というイメージを抱く人が多いだろう。しかし、そういったイメージを払拭したいという想いを持った実践真宗学研究科の若手僧侶たちが立ち上がった。企画代表の山本成美さん（同研究科3年次生）は「お坊さんの衣装は一般的に『黒』のイメージがある。実際にはカラフルな法衣があることを知ってほしかった」と話す。

Fashion Show

メインイベントのファッションショーでは、ポップな音楽とともに出演者がひとりずつ登場して歩き、思い思いのポーズを決めると歓声が上がった。これだけ聞けば、普通のファッションショーと何ら違いはないだろう。出演者全員が僧侶で、そのファッションが袈裟・衣であることを除けば・・・・。さまざまな格好で10数名の僧侶が登場したが、その中でも最後の豪華絢爛な七条袈裟が大変印象的であった。カラフルな法衣の上に、金色を基調とした大きな袈裟で、見る者の目を釘付けにした。しかし、このファッションショーはただ見せるだけではない。出演者がまとっていた袈裟・衣の解説が最後に行われるのである。これは、仏教や浄土真宗に親しみのない人を対象としていることの現れであり、大変有意義であったのではないだろうか。

NONOSAMA

「ののさま」は、いままで仏教に馴染みのない若者を対象とし、仏教や浄土真宗を知ってもらい、より身近なものに感じてもらおうという企画趣旨のもと、2009年に本願寺聞法会館で第1回目を開催し、法衣ファッションショー、仏教絵本や法話などを催した。今回はその第2回である。前回から開催場所を重要文化財である龍谷大学大宮学舎に移し、新たにセルフケア、念珠作りや東日本大震災パネル展示など6つのブースを設けた。また、イベントのクライマックスとして、23名の僧侶がカラフルな法衣をまとい、1万枚の華葩（けは：花びらを形どった紙）を巻きながら、雅楽の生演奏とともに歩くという行道を催した。

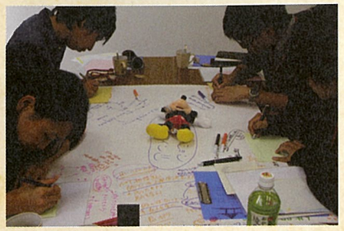
山本 成美（25）
Narumi Yamamoto
1987.10.21 生まれ　A型
山口県出身
龍谷大学社会学部
コミュニティマネジメント学科卒

『悩める学生がお寺で過ごす一泊二日』

「私を知らない私を知る時間」と題されたこの企画。一読しただけでは、「ん？」と読み直してしまうようなタイトル。しかし、意味深いのはタイトルだけでなくその企画主催である。「人には自分が知る自分だけではなく、他人しか知らない自分、もしくは自分も他人も知らない自分が存在する。一泊二日という時間の中で、独りではなく、たくさんの仲間と自分自身を見つめ直す機会を作りたい」と話すのは、同企画主催の一般社団法人「リヴオン」のインターン生である瓜生智子さん（実践真宗学研究科3年次生）である。対象は、就職活動や将来などに悩む大学生。参加者定員を16名に限ったことや、人々が繋がる場所であり自分を見つめ直す場所でもある寺院を開催場所にしたことにも主催者の意図が読み取れるのではないだろうか。

秋晴れの10月中旬。関西圏の大学生・大学院生を中心に15名（1名の欠席）が京都の寺院に集った。参加者が自分の人生を振り返ったり、自分が読まれたい弔辞を考えたりというさまざまなワークの他、臨済宗僧侶の大原大萌氏による座禅指導や元NHKアナウンサーの森吉弘氏の講演などが実施された。

そして、二日目の最後には全員の前で5分間の自己紹介を行った。絵で自分を表現したり、唄を歌ったりと思い思いの自己紹介をした。元々は自分を表現することが苦手だと話していた参加者が、最後には堂々と自らを表現することができていた。それは、決して参加者個々人のスキルアップだけではない。自分のことを他人に表現し、ありのままに伝えても良いのだと思えたことが見事な自己紹介に繋がったと言えるだろう。ある参加者は「この場では、いままで怖くて出せなかった自分を出せた気がした」と感想を述べた。初対面の参加者たちが、わずか一泊二日を共にしただけで、かけがえのない友人となり帰路についた。このことは、ありのままに自分を表現し、それを受け入れてもらえたという安心感や仲間という人との繋がりがもたらしたものであると言えるのではないだろうか。企画、人、場所が見事に作り上げた一泊二日であった。



Text/Photo : Jun Hashiramoto

瓜生 智子 (25)
Satoko Uryu
1987.08.10 生まれ　O型
福岡県出身
龍谷大学社会学部
コミュニティマネジメント学科卒

『シンガポール交流会』

DON' T BE AFRAID!
DON' T BE AFRAID!!

英語を怖がらずに、話してください。

今回は、龍谷大学の学生とシンガポールの学生の交流会に参加して来ました。英語と中国語と日本語と、様々な言語と文化を超えての交流会。最初は自己紹介など緊張の中の手探りの雑談からばかりでしたが、次第に、日本仏教の現状に関して等、本題に入ります。日本のお寺は観光地になるのか？神社との違い、住職の世襲制の話、神社と寺の違い、結婚の話、髪の毛の有無の話。笑　向こうでは、僧侶が結婚するなんて考えられらないし、世襲制なのもほとんどないらしく、とても驚いていました。多くはそんな仏教関連の話でしたが、時折横のグループから「シャーマンキング!!」という声が聞こえてきたりして、日本のサブカルチャーの話にもなっていたようです。そんな交流会の中でも一番印象的だったのが、言葉の壁を超え超えたコミュニケーションでした。私達の外国への関心が低いのか、相手の意識が高いのか、シンガポールの学生は、みんな最低限の英語は当たり前のように話せていました。そしてだからこそ、私たちの英語が出来ないことによるもどかしさがありました。それでもお互いを分かり合おうとする気持ちが、私達を繋いでくれました。英語も分からなくても、知ってる単語を繋げばそれなりに通じます。例えば住職は「temple' s boss」で通じるし、坊主頭は「budda' s hair」で通じます。

そして最後に聞いた言葉が印象的でした。「僕の英語ってどうでした？通じてました？」そしたら「DON' T BE AFRAID! DON' T BE AFRAID!! 英語を怖がらずに、話してください。」と。その後、「とても楽かったです。」と言って筆談で使ったメモ書きを嬉しそうに持ち帰っていました。正直な話、今回の交流会は最初はそこまで気乗りしていませんでした。言葉も分からない。何を話せばいいかも分からない。最初はそんなもどかしいという気持ちで楽しめていませんでした。でも終わってみると、「もっと話したい」「もっと異文化に触れたい」という名残惜しい気持ちが自然と湧いていました。今回は本当に普段の生活ではなかなか体験出来ない、貴重なものとなりました。

Text/Photo : Toshitaka Naka

【交流会運営】
堀　靖史 (36)
Seishi Hori
1976.12.11 生まれ　AB型
広島県出身
龍谷大学大学院実践真宗学研究科
実習助手

SORYO for EVERYTHING

Art Direction : Yusuke Tanaka（LIP） Text : Ichigo Sakaguchi/Kunihiro Fujihara Photo/Design : Kenji Ito

「地球環境問題における僧侶の役割」

阪口一吾

不法投棄・産業廃棄物等による土壌汚染、家庭・工業排水による水質汚染、森林伐採による砂漠化。こうした所謂環境問題は既に何十年も以前から言われていることであるが、一向に改善されない。それどころか益々ひどくなる一方である。

そこで、我々僧侶がこういった問題にどのように関わっていけるのか、研究を進めていきたい。

地球環境問題は一九六〇年代の後半頃から次第に顕著になってきた。その要因としては世界人口の急激な増加とエネルギー資源の大量使用があげられる。いずれもすでに環境問題の要因の代表的なものとしてよく知られている問題であるが、意外とその内容については曖昧な知識しか持たない場合も多い。したがって、環境問題を理解しようとする場合には次のような点に気を付けなければならない。

第一に、環境問題は地球規模の関係性の中で起こっている問題である、ということ。

第二に、環境問題は現在の世代だけでなく、未来世代の生存にも大きく関わる問題である、ということ。

第三に、環境問題は私達一人ひとりが当事者である、ということ。

第四に、環境問題は環境だけではなく、様々なレベルの問題（政治、経済など）を含む問題群を形成しているが、同時に私達一人ひとりの人間のあり方の問題でもある、ということ。（『環境問題を考える』本願寺出版社より）

このような点を理解しないと、環境問題の全体像はなかなか見えてこないと言える。人間は食物連鎖の頂点に立つ者として、他の生命を食することにより生きている。生命は儚く脆いものであるという「無常」を知った上で、数多の生命の犠牲の上に立って今自分が生きている。自分という命はそうして成り立っており、生かされているのだということを「ありがたい」と感じながら、全ての生物との共存生活の在り方、つまり「共生」について考え、現代教育の中心とすべきである。現代は豊かすぎる世の中になってしまっており、その豊かさは「いのちの連鎖」というものを忘れさせてしまっている。店に陳列されてあるパック肉を食することは当然でも、そのパックまでに至る過程について、人々は目を覆い「残酷だ！」と叫び、効率ばかりを最優先し、死の見えない時代になってしまっている。

今、私達はこの環境に生かされている、この世界で生かさせて頂いているという謙虚な気持ちを復活させていくべきである。環境問題は一向に改善されないと前述した。それは現在の生活水準に達してしまっている現代ではもう仕方のないことなのかも知れないが、それにしても人々の行いは過剰過ぎるのである。環境問題は現在、世界規模で取り組まれている課題である。ゴミの分別・リサイクル一つとってみても、そのちょっとした手間を惜しまなくなれば、そうした一人一人の積み重ねが、巨視的に言えばやがて世界を救う＝地球環境の改善につながっていくのである。

私は、これまで述べてきたことを世間の人々に伝えたい。特に、これからの世を担っていく子供たちに伝えたい。遊ぶと言えばテレビゲームばかりで、命に触れる機会が無くなってしまったいわゆる現代っ子に対して「リセットできない命の存在」を伝え、「何事も粗末にすると後々自分に返ってくる」ということと、巨視的に言えば「地球環境を善くするも悪くするも自分たち次第」だということに気づいてもらえるように、「人」「自然」の共生についてお話していきたい。共生とは、共に生きるだけでなく「共に悲しむ」ということである事も知ってもらいたい。全ては個人が一番自然体になれる家庭から始まると思うのである。

環境問題の本質は何か。環境問題とは、「誰か（何か）について論じる」だけでは、解決には至らないだろう。環境問題は「自分の生き方を問い直す」ところから始まるのではないだろうか。

阪口　一吾（写真中央）
Ichigo Sakaguchi
実践真宗学研究科三年次生

「IT時代における伝道」

藤原邦洋

仏教は釈尊滅後、仏典によってその教えが記録され伝えられてきた。その仏典を読むことによって思想を理解し受容してきたのである。その手助けになったのが紙の発明、印刷技術の発達である。つまり、「宗教」と「伝道」と「メディア」は密接な関係があることがわかる。現代を生きる人々はそのような文明の発達の末、科学主義、合理主義、世俗主義、功利主義、利己主義、物質至上主義などと呼ばれようになった。科学的思想の普遍化により、論理的に実証することに探究してきたが故に、現代人の感覚、世界観、価値観、思考形式は変容を遂げ、宗教的観点から乖離し、「非宗教」、「無宗教」と表わされる宗教形態が生まれたのである。科学の恩恵によって、それを無視しては生きていけない我々に宗教は必要ないのであろうか。

それは否である。人間の根源的な欲望、本能的な欲求によって発展してきた科学文明は老病苦・愛別離苦・求不得苦など様々な「苦」の面で釈迦、親鸞の生きた時代とは全くもって変化しており、その認識にも大きな相違がある。しかし、「死」に関しては、現代の文明をもってしても解決できていない。生あるものは必ず死に至るのである。この生死に関する苦悩は、仏教、真宗によって解決されるのである。

現代の浄土真宗の伝道に対して、上山大峻氏は以下のように述べている。

仏陀の智慧と親鸞の勇猛心にもとづいて、科学の効用性も取り入れ、欧米思想を牽制し矯正しながら、真の人類の福祉と平和をめざして、時代に応じた新しい価値観や人生観を模索していくべきであろう。「他力」救済の純粋性を保持することもさることながら、大胆に新しい現代という時代に生きる人間のあり方を提言していくべきであるまいか。それこそが浄土真宗の「伝道力の回復」という課題に応えることであろう。

つまり、科学に反発することなく、取り入れるところに現代伝道の可能性がみられるのである。先も述べたように、宗教の伝道と科学によって生まれたメディアの利用には相関関係がある。実際、文書伝道（手紙、雑誌、新聞）からラジオ伝道、テレビ伝道へと新しいメディアの台頭とともに伝道方法も確立されていった。そして、現代はIT社会、情報化社会とも称されるように、インターネットの普及が一つの社会・世界を構築している。世界中でいつでも、どこでも、自由に情報を収集・受発信を可能にし、また、新しいコミュニケーションの「場」を作り上げることもできる媒体として我々の生活の一部になっているといっても過言ではない。

このような世相の推移に、浄土真宗は対応しているだろうか。

時代に迎合するのではなく、現代人の価値観、世界観に即応した伝道姿勢、方法のために、我々は新しい伝道方法の確立、体系化、組織化を行わなければいけない。インターネットとは、情報の伝達や公開によって、異なる伝道手法を含めて多面的・多角的に補完する機能が生じる可能性がある。これを利活用し、真宗の布教・伝道を補完することによって、「一宗の繁昌」に繋がるのではないか。

藤原　邦洋（写真右）
Kunihiro Fujihara
実践真宗学研究科一年次生

「生死の苦海ほとりなし　ひさしくしづめるわれらをば
弥陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける」

この御讃題は、親鸞聖人がカナ文字を使いながら今様形式で書かれた三帖和讃です。三帖和讃とは、浄土和讃・高僧和讃・正像末和讃の三つから出来ています。今日は高僧和讃の中からインドの高僧であります龍樹菩薩を讃えられた、龍樹讃の一首から頂きました。

ここでは、私たちの生きているこの世界は、迷いの世界で苦しみばかりの海のように果てしないと例えられています。この迷いの海に、遠い過去より沈んでいる私たちを、阿弥陀様の本願の船は、乗せて必ずお浄土へ渡してくださると、阿弥陀様の本願のお救いを明らかにされている和讃です。

阿弥陀様は、私たちを救うために五劫という長い時間思惟され、四十八願の誓願を建てられました。そして、この願いを成就する為に、兆載永劫という私たちの分別では思いはかる事の出来ないぐらい長い時間を修行されたのです。その修行とは、六度万行の六波羅蜜といわれる厳しい修行です。六波羅蜜とは次の通りです。

（一）布施　施しをすること。
（二）持戒　戒律を守ること。
（三）忍辱　耐え忍ぶこと。
（四）精進　進んで努力すること。
（五）禅定　精神を統一して、安定させること。
（六）智慧　真実の悟りを得ること。

阿弥陀様は五劫という時間思惟され、兆載永劫という時間をかけて六度万行のすべてをかけめなく、修行されたのです。五劫やら兆載永劫といっても一劫という時間の長さがわからないと、どれ位長いかわかりませんね。『大智度論』という書物の中には、四十里四方の石を百年に一度ずつ薄い衣で払ってその石が摩擦して、無くなったら一劫とされています。それの五倍ですから、とても私たちには思い計ることができないほどの時間ですね。よくよく考えて見ますと、私という衆生は、阿弥陀様がそれほどの修行をしなければならないほど、迷いをはなれる事が出来ない罪悪を背負っているのです。しかし、私たちはその事にも気づく事が出来ず、迷いの世界に埋没した日々の生活を送っています。それを親鸞聖人は、阿弥陀様の本願を船に例えられ迷いの世界に沈みきっている私たちを必ず救い上げ本願の船に乗せて、お浄土に渡すと示されたのが、今日最初にいただきました御讃題です。この事を私自身味わせていただく出来事がありました。

私は広島県呉市にあります、川尻町という所で生まれ育ちました。まだ多く自然が残っており、小さい時はよく自然の中で遊んでいました。小学校の低学年の時でしょうか、親戚のお兄ちゃん達とお正月に、近くの沼まで魚を見に行った事があったんです。色んなものに興味津々だった私は、その沼を覗き込んでいました。そしたら、ズルズルっとその沼に頭から落ちってしまった事があったんです。どうにか岸に辿り着こうと必死でした。しかし、当時、まだ泳ぐことの出来なかった私は、その場でもがく事しか出来なかったのです。また沼なので足元には泥が溜まっており、もがけばもがく程体が沈んでいくのです。どうにか、親戚のお兄ちゃん達が助けてくれたのですが、私は溺れた時の恐怖と寒さで早く母に会いたくなり、涙が止まりませんでした。そんな気持ちで家に着いた時、話を聞きつけた私の母が真っ先に私に駆け寄り、泥まみれになって冷え切っていた私のびしょ濡れの体を、なんのためらいもなく力強くギュッと抱きしめてくれたのです。その時の、母の気持ちは私には想像もつきませんが、抱きしめられたこの私は、心底からの安心を覚えもっともっと泣いていました。その涙は先ほどの恐ろしさなどの涙ではなく、母から感じた安らぎと暖かさからの涙だったと思います。

阿弥陀様の本願とは、どのような修行も修することが出来ず、迷いを迷いともしらず、迷いの海に溺れ沈んでいる私たちを、必ず救うと誓われています。そこに、私たちのはからいや行いは一切いらないのです。阿弥陀様は、私たちに六波羅蜜という厳しい修行を要求されているわけではありません。この私がどのような姿であろうとも、迷いの海の深くに沈んでいようとも阿弥陀様自身が私のところまで来て、不安におのの く私をそのまま抱きかかえ本願の船に乗せると働きかけて下さっているのです。沼に落ち泥まみれになった私を何のためらいもなく抱きしめてくれた母の安心と暖かさを私に届けてくれたその心に、阿弥陀様の本願の心がありがたく味あわれてまいります。

阿弥陀様の本願をいただくということは、どのような修行を行なっても迷いから離れる事ができない私たちを、必ず救うと五劫もの間、思惟され兆載永劫という時間修行された阿弥陀様のご苦労を聞かせていただきお任せしていく時、私たちの口から南無阿弥陀仏の六字のお念仏となって、御恩報謝のお念仏がこぼれてまいります。親鸞聖人が「生死の苦海ほとりなし　ひさしくしづめるわれらをば　弥陀弘誓のふねのみぞ　のせてかならずわたしける」と詠われた阿弥陀様の本願の救いの一旦を味わいながら今日のご縁とさせていただきます。

合掌

実践真宗学研究科二回生　寺西龍珠

「如来の作願をたづぬれば　苦悩の有情をすてずして
回向を首としたまひて　大悲心をば成就せり」

私の実家は熊本のお寺です。少し前に実家に帰った際、丁度報恩講があり、法話をさせていただけることになりました。法話の経験は過去にもありましたが、幼い頃から知っている御門徒さんの前でお話させていただくのは妙な緊張感がありました。法話は無事に終わり私もほっと胸をなでおろし、改めて聴聞されている方を見てみますと、何と涙を流しておられる方がいるではありませんか。その姿を見て私は、

「俺の法話も人を感動させられるまでになったか」

と満足しながら報恩講を終えたものです。その夜家族で食事をしていると父が、

「今日のお前の法話を聞いて泣いていた人がいるのに気付いたか？」

と尋ねてきました。勿論わかっていたので私が頷くと、続けて、

「じゃあ、その理由は分かるか？」

と尋ねてくるので、どう答えようかと悩んでいると、父は私にこう言いました。

「あの人が泣いたのは、別にお前の話に感動した訳じゃない。あの人はお前が小さな頃から、それこそ俺がまだ若い頃からお寺に来てくれている。そんな人だからこそ、ウチの爺さん、俺、そして遂にはお前にも阿弥陀様の教えがちゃんと伝わっている、そのことが有難くて涙を流していたんだよ」

父には私が調子に乗っていたことなどお見通しだったのでしょう。その言葉を聞いてハッとさせられました。私は自分があたかも偉い人間かのように思っていたのです。勉強したから、みんなの前で話ができるから、自分を優れた者のように勘違いしていたんですね。人に話すということを考えるあまり、自分自身で仏法を味わうということを忘れていたのです。長い時間をかけて私の元に届いた仏法に、触れたつもりで触れていなかったのかな、と反省しました。

そもそも仏法とは誰の為にあるのでしょうか。親鸞聖人は『正像末和讃』に次のような和讃を残されています。

如来の作願をたづぬれば
苦悩の有情をすてずして
回向を首としたまひて
大悲心をば成就せり

阿弥陀様の誓願のいわれは苦悩の有情、つまり迷いに苦悩する私たち一人一人を見捨てずに、長い間の修行の功徳をもって私たちを救う為だと言われているのです。私の善行によって阿弥陀様に報いるのではなく、私の愚かさをきちんと知っておられる阿弥陀様が私を救う為に私に回向して下さっているのです。すぐに調子に乗ってしまう愚かな私のことをきちんと見抜いたうえで、私自身よりも私の幸せを願っておられるのです。

阿弥陀様は遠い昔から私を救う為に心を砕いて下さる。この私を救う為に長い時をかけて伝わった教えがある。こんな私でも救って下さる。こんな私だからこそ救って下さる、それがただ有難い。自分の愚かさと、阿弥陀様への感謝を味わわせていただくことのできた有難い御縁でした。

南無阿弥陀仏
実践真宗学研究科一回生　武藤自然

実践真宗学研究科１回生
武藤自然

実践真宗学研究科２回生
寺西龍珠

司会 / 貴島　信行氏

寺西龍珠（二年次生）　田中至道（二年次生）　大塚雄介（二年次生）

RYUKOKU GRADUATE SCHOOL SYMPOSIUM

今回のシンポジウムでは、現役の医師（中村仁一氏）、第一生命経済研究所の主任研究員（小谷みどり氏）
仏教者（早島理氏）という立場の異なる三者を交えての講演が開かれた。
今回のテーマは「人生の終わり方ー死に至る生ということー」についてだ。

中村氏からは、終末期の医療とどう付き合うかが話され、現代人は医療に対して信仰にも似た期待をしてしまっていると指摘された。
そもそも医療とは、回復見込みのある場合や、生活の質が向上する場合にのみ使うものなのだそうだ。
それよりも重要なのは自然に老い、死にゆく姿を後世の人に見せることであると言う。
現代人の多くは、自然死は非常に穏やかなものであるにもかかわらず、非常に恐ろしいものとイメージを持ってしまっている。
彼らに、それを見せる事により、死への恐怖を少しでも取り除くことが出来るという。
そして死を意識して生きることが生を意識して生きることになる、「逝き方は死に方」だと締めくくり、話を終えた。

２人目の小谷氏は、現代人の多くは死に対しての不安が大きな物となっており、それを背景に自分らしい死後を望む人が増加しているという。
そして、以前までは家族が考えていた墓や葬式のことを、自分自身が考えるという傾向が生まれてきていると主張した。
老後を迎え自立出来なくなった時、誰が自分を支えてくれるのか、死後どのような墓に誰と入るのか誰が思い出してくれるのか。
そのために生前、誰とどのような関係を築く必要があるのか。
現代はそのようなことを意識した自助努力が必要な時代になっているのかもしれない。

そして最後の早島氏は、仏教者としての立場から、生きることと死ぬことについて語った。
人が死に直面した時、その命を延ばすための薬はあってもその薬を飲ませるための薬は無い。
生きることは、本人が生きていくという意思を持つことが重要である。
その為には、死んでも終わらないという命、死んだらどこに行くのかという道標との出会いが必要であり
そのためには「かかりつけのお坊さん」を持っておくことが大切だと述べられた。

今回のシンポジウムでは、普段なかなか意識しづらい〝死の直前から死んだその後〟までの話を頂いた。
いつかは必ず迎える死。死を意識することは
生を意識することにもなる。

もし余命半年と宣告されたら、あなたならどうしますか？

Text : Toshitaka Naka　Photo/Design : Kenji Ito

中村　仁一氏

小谷　みどり氏

早島　理氏

他力本願 .net OPEN 西本願寺 2nd Website

- □ くらしの仏教語豆辞典
- □ グチコレ
- □ 僧侶の部屋
- □ 写京
- □ 僧職図鑑
- □ こそだてオススメえほん

http://tarikihongwan.net

「JISSEN 03」
2013 年 4 月 1 日 発行

発行 Publish
龍谷大学大学院
実践真宗学研究科 出版部会

〒600-8268
京都市下京区七条通大宮東入大工町 125-1 龍谷大学清風館 3F 実践真宗学研究科 合同研究室
TEL : 075-366-0621
MAIL : r.jissen.publish@gmail.com

編集長 Editor-in-Chief
デザイン Designers
制作 DTP
伊藤顕慈 Kenji Ito

ライター Text
根來亮慧 Ryoue Negoro
佐藤慶樹 Keijyu Sato
石川大夏 Taika Ishikawa
柱本　惇 Jun Hashiramoto

写真 Photographs
仲　俊考 Toshitaka Naka

※この情報誌「JISSEN」は、龍谷大学大学院実践真宗学研究科院生が、実習の一環として主体的に取り組み発行するものです。

【表紙】
タイトル：世の中安穏なれ　仏法ひろまれ

豊田真理沙
（北豊教区門司組徳念寺）
http://marisatoyoda.com/

[PROFILE]
1985　生まれ
2008　大阪芸術大学 芸術学部 情報デザイン学科卒業
2011　京都造形芸術大学大学 院修士課程 修了
2012　現在中央仏教学院在籍

[WORK]
2010-2011　NHK 連続テレビ小説『てっぱん』笹井拓朗部屋・絵画指導担当
第 22 回 / 第 23 回 こどもの城 キリンファミリーオペレッタタントさんのふしぎなレストラン（青山円形劇場）映像ビジュアル担当

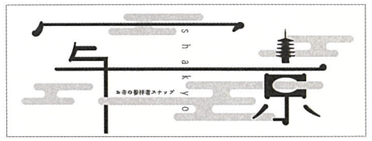
【写京スタッフ募集】

「JISSEN 03」にて編集長・デザイン・制作を担当した伊藤氏が手がける、他力本願 . net 上における新企画 『写京』。 発足したばかりということもあり、この度一緒に『写京』を作り上げていってくれる学生スタッフを募集します。尚、スタッフはボランティアスタッフとなりますのでご注意下さい。

【募集要項】
・カメラやファッションがお好きな方
・土日どちらかある程度の自由のきく方

興味・関心等のある方はメールにて、件名に「写京スタッフ募集係」 と明記の上、下記までお問い合わせ下さい。

〈お問い合わせ〉
MAIL ： r.jissen.publish@gmail.com



http://tarikihongwan.net/category/memory